仙台北三番丁教会説教　笠間良牧師　二〇二四年　四月二一日
「私の羊を飼いなさい」　ヨハネによる福音書　二一章　一五節～一九節

かねてより朝の日課として、いわゆる朝ドラを観ながら食事をしていますが、今回の「虎に翼」というのは日本初の女性裁判官の誕生を描く作品です。そこで法律とは何か？という、なかなかに考えさせられる問いが掛けられており、これから色々考えながらその答えを出していくように思えます。今国会で審議されている共同親権のことにもつながる話もあったりして、興味深く見ています。

この番組でも語られる法というのも、改めて考えてみると複雑で、明確な答えは難しい部分があります。特に人を裁くという意味で法を考えると、色々思う事があります。

それでは聖書を読んでみますと、いずれも明確に書かれています。旧約聖書の時代はいわゆる律法というものがありました。律法とは旧約聖書創世記から申命記、いわゆるモーセ五書に書かれている神様の言葉を基準としたものです。このモーセ五書をヘブライ語でトーラーと言います。ただこれだけでは全ての法律をカバー出来ないため、そこから律法学者達が聖書の記述と矛盾しないものとして考えた、ミシュナーと呼ばれるものがあり、それを合わせて律法と言います。この律法を守ることがイスラエル人として生まれたことの義務とされていました。ものすごく簡単に言えば、旧約聖書に書かれていることに逆らわないということです。

それに対してイエス様から始まります新約聖書はどうかと言いますと、基本的には旧約聖書と同じく、神様の言いつけを聞くことが中心となります。ただし、旧約聖書の時代とは大きく異なる部分があります。今回はそれを考えてみましょう。

本日の聖書箇所はガリラヤで、漁から帰ってきたペトロ達を迎えたイエス様が全員と共に食事をしていた後の出来事について描かれています。

一五節を見ますと、「食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。」とあります。このやりとりが実に三回も繰り返されています。

三回も繰り返されたことから、ペトロは悲しくなったと書かれています。一七節で「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」と話していますが、全てを知っているはずのイエス様が何度も同じ事を聞くので、それは自分を責めているのか、それとも信用がおけないのかという気持ちになって、情けなくなってしまったのかも知れません。

実際ここでのイエス様の語り方はペトロを責めるかのように見えてしまいます。

ペトロはイエス様の一番弟子でしたし、誰よりもイエス様に忠実であろうとした人物です。ヨハネによる福音書一四章三七節では「主よ、なぜ今すぐ付いて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。」と言ってもいます。

ところがそんなペトロですが、イエス様が捕らえられた時に恐くなって逃げ出してしまいました。一八章の一五節以下で描かれていますが、ペトロは夜が明ける前に三回もイエス様のことを知らないと言ってしまったのです。

先に「私は絶対裏切りません」と言った手前、イエス様との大切な約束を破ってしまっています。はっきり言えば裏切りそのものです。

私達でも実生活で様々な約束をしています。仕事の上では契約書も交わします。気軽な人間関係でもルールがありまして、約束をちゃんと守って人間関係は円滑に動きます。誰かが勝手をして約束を守らないと関係は崩れます。人の間でも約束を守ることは基本です。ましてや神様との関係で交わす契約は神聖なものですから、これを破るのは罪深いこととなります。神様との間の契約は魂の契約です。それを破ると言うことは、自分に対しても神様に対しても裏切りを働くことです。

信仰者として一度イエス様を信じますと誓った者がイエス様を否定するということは、私は信仰を捨てましたと宣言する事と同じです。

そこまでのことをペトロはしてしまったのです。そんなペトロが再びイエス様を信じますと言ったとして、信用ができるか？と言われたらだいぶ微妙だと思います。約束を守れない人を信用できるか？前に一度裏切った人はまた裏切るに違いないという思いになるのが当然です。

でも一番それを痛感しているのは、他でもないペトロ自身でした。他の人がどう思おうと、なにより自分自身が許せないと考えて然りです。イエス様の前に立つ事が出来ない存在であるということを誰よりも一番分かっていたのがペトロ本人だったのではないでしょうか。こんなことまでしでかしてしまった自分だけど、イエス様を本当に愛しているし、信仰も捨てられない。もし償いをすることが出来るのだったら、なんでもしますという強い願いと反省がそこにあったでしょう。

そんなペトロにとってこのイエス様の問いは重要な意味を持っています。ペトロに対して、イエス様は意地悪とも言えるほど繰り返し同じ問いを発します。その数は三回です。三回という数はペトロがイエス様を否定した回数と同じです。イエス様は実はその問いを発する毎に、ペトロに苦しみを与えますが、その苦しみを経て赦しも与えていると考えられます。

ペトロにとっては、イエス様の言葉一つ一つが自分を責める強い言葉です。言われる度に悲しくなります。しかし、その一つ一つの言葉にペトロは逃げずに答えています。

実はこのやりとりは、ペトロにとって、再び信仰告白をしている場になっているのです。イエス様から繰り返される問いに答えることでペトロは私はあなたを信じますと言い続けます。その一言一言は苦しみですが、実はこの苦しみを受けることはペトロにとっての救いでもあったのです。

何を救いとするのかはイエス様の問いから推測できます。

ここで語られたイエス様の言葉ですが、最初に「この人たち以上にわたしを愛しているか」と聞いています。一見これは「ここにいる他の弟子よりもあなたの信仰は勝っているか？」という問いにも見えますが、対比は意味がありません。実はこの問いは、あらゆるものを捨ててしまっても、たとえ他の全てを諦めざるをえない時でも私を愛することができるか？唯一の愛の対象をイエス様にできるか。という問いです。

この問いは、ペトロだけでなく、私達にもかかってくる問いです。信仰者たるあなたはイエス様を愛していますか？

その上でイエス様が語った「わたしの羊を飼いなさい」とは、わたしを愛する心があるならば、その愛をわたしの愛するもの全てに注ぎなさい。という言葉になっています。それは即ち、イエス様が愛されたこの世界を愛すること、ここでは、世界全てをイエス様に向かわせられるよう、その愛を伝えることと直結しています。

イエス様は既にペトロを赦しています。その上で、ペトロがもう迷うことなく信仰の道を進むことを確信してこのように言っているのです。

あなたは何よりもイエス様のことを愛し続けられますか？たとえそれがあなたの命を奪うことになったとしても、信仰を貫けるほどですか？ペトロは少なくとも、この苦悩を経て、本当の信仰というものを手に入れることができました。一八節にペトロの行く末、つまりどのようにして亡くなるかまで語られていますが、そこに至るまではっきり信仰を貫けるだけの覚悟をここで得ているのです。

最初に私が言った、キリスト教における法とは何かと言いますと、それはここに書かれているとおりです。イエス様を愛しているかどうかというこの一言に尽きます。キリスト教における法とは、イエス様を愛すること、その上で、その愛を分け与えているかということです。

実はこれこそがキリスト教が世界宗教になった理由の一つとなります。地上の私達は生きている場所での法律に従いますが、その上で、イエス様を愛することで、神様によって正しいと認められることになるのです。勿論地域や国毎に、その国独自の法律は存在します。それらを守りつつも、最後に愛するものをイエス様であるとすることです。愛こそがキリスト教の中心となるのです。